The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Werner Sundermann 教授を偲ぶ
Author(s)	吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 2013, 28, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69752
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Werner Sundermann 教授を偲ぶ

吉田　豊

イラン語文献研究，マニ教研究の巨星 W. Sundermann（ズンダーマン）教授は 2012 年 10 月 12 日，ベルリンの自宅でなくなられた．1935 年 12 月 22 日にドイツ Sachsen-Anhalt 州 Harz で生を受けられた教授は享年 76 であった．逝去される数年前から種々の病魔とりわけ筋萎縮に犯され酸素吸入をしながらの闘病であった．今は逝去を悼む一方で，長年の闘病生活から解放されたことに安堵感のようなものを憶えるのは筆者だけではないと思う．

教授は Humboldt 大学で H. Junker 教授および B. Alavi 教授のもとでイラン学を学ばれたほか，H. Simon 教授からはアラビア語を学ばれた．ちなみにウイグル語文献研究の世界的権威であり生涯の盟友でもあった P. Zieme 教授とは，化学を志していた高校生の Zieme 少年に，地域で行われる夕方の課外授業でアラビア語を教えて以来の知り合いであったとうかがったことがある．1958 年に大学を卒業した後は同大学の近東研究所の助手になり, 1970 年には, 新設された東ドイツ科学アカデミー古代史・考古学研究所のオリエント部門の研究員になり，ドイツ・トルファン探検隊将来の中世イラン語マニ教文献の研究に邁進された．東西ドイツ統合後は，ベルリン・ブランデンブルグ学士院に置かれたトルファン学研究組織に所属し 1993 年から，65 歳で定年退官する 2000 年までその代表を務められた．統合後の 1992 年からベルリン自由大学の名誉客員教授となり，同大学でも教鞭を執られた．定年後もトルファン学研究所に机を構えて研究を続けておられたが，健康を害されてからは自宅で療養を続けながらの研究生活であった．

教授は世界でも屈指のマニ教学者でありまたイラン学者でもあった[1]．マニ教に関する論文やイラン学百科事典の執筆項目は数え切れない．イランの宗教や言語，歴史についての論文も数多い．その極初期，1965 年に出た論文には，伊藤義教教授が世界に先駆け解読したことでわれわれ日本人にもなじみ深い，西安出土のパフラビー語と漢文の墓誌に関する Th. Thilo 教授との共同論文がある．しかしことイラン語で書かれたマニ教文献については，真に他の追随を許さない世界一の研究者であり続けた．その最初の論攷はマニ教文献にみられる福音書のパッセージに関するもので 1968 年に発表された．1973 年に刊行された中世ペルシア語とパルティア語で書かれた宇宙論と説話の集成は，Berliner Turfantexte (= BTT) の第 4 冊として公刊されたが，これは戦後の中世イラン語トルファン文書研究の画期となった．彼の遺作となったのは中世ペルシア語とソグド語のマニ教文献を扱った *Die Rede der lebendigen Seele*, Turnhout 2012 であったが，やはり BTT の第 30 冊として 2012 年秋に公刊されたのは象徴的である．これを含めて BTT のシリーズで実に 6 冊を出版された．しかし死ぬ直前まで文字通り心血を注がれたこの最後の著書の刊行の直前に他界された．

教授の学識と人間性は，還暦と古希の記念論文集が刊行されている上に，65 歳を記念して，教授の特に重要なマニ教研究論文を集めた *Manichaica Iranica*, Rome 2001 が 2 巻本で編集されるという希有の事態にも現れているであろう．この論文集では個々の論文の後に，論文発表後明らかになった誤りや新事実を詳細な注釈として教授自らが添えている．それを行うことがどれだけ難しいかは，我々自身がよく認識しているところであり，同じ分野で研究する者としてただただ感服するばかりである．感服すると言えば，ソグド

---

(1) Ch. Reck 博士による教授の業績表は http://www.bbaw.de/bbaw/Forschung/Forschungsprojekte/turfanforschung/bilder/Bibliographie_Sundermann2012.pdf で閲覧することができる．いち早く出版された P. Zieme 教授の追悼文（*Acta Orientalia Hungarica* 66, 2013, pp. 109-115）も参考になる．1993 年発行の『内陸アジア言語の研究』第 VIII 号でも教授の当時の業績目録を掲載した．その段階で業績の数は既に 170 点を越えていた．

語研究者でトルファン文献にあるマニ教，仏教，キリスト教の 3 宗教のテキストすべてを校訂できたのも教授だけであったことを付け加えておこう．

マニ教研究が必ずしも盛んとは言えない日本でも教授はイラン学者，中央アジア学者として有名であり，日本の研究者との交流も多かった．特に統合前の東ドイツとの学術交流を行っていた龍谷大学側の一員として，東ベルリンを訪れる機会があった故百済康義龍谷大学教授とは深い友情で結ばれていた．百済教授の招きで何度か来日され，その都度，数週間龍谷大学で共同研究をされた．共同研究は Sundermann 教授が仏教ソグド語文書の英訳を作られ，それをもとに百済教授が原典を比定するというスタイルであった．このようにして 5 本の論文を発表された．そのうちの 1 本は本誌（第 XIII 号, 1998 年）で発表されている．比定された仏典には『摩訶般若波羅密経』や『薬師経』の様な有名な大乗経典だけでなく,『仏説時非時経』,『仏説犯戒罪報軽重経』,『思益梵天所問経』があった．返す返すも残念なのは『大乗涅槃経』のソグド語版の研究で，ベルリンには大小 80 近くの断片があり，その研究の大半をお二人は終えておられたはずであったが，百済教授が病を得られてからはそれを完成させる為の最後の詰めが実現しないまま，今また Sundermann 教授までもが逝かれた．教授はこれら以外にも Araṇemi-Jātaka と Daśakarmapathāvadānamālā のソグド語版についても研究を発表された．この二つはトカラ仏教を淵源とするもので，ソグド語仏典の成立を考える上ではきわめて貴重な文献である．もう随分前になるが，教授から彼が作ったベルリンの仏教ソグド語文書の，手書きのメモのようなものを複写させていただいたことがある．書体や写本の形態的特徴によって分類したもので，ベルリンにあるソグド語仏典全体を通覧して全体像を把握しておられたことに驚いた記憶がある．もとより発表されることはなかったが，これらの断片のラフなテキストも作っておられたのだと思う．

私も Sundermann 教授と共同で仕事をしたことがある．最初は 1980 年にベゼクリクで発見されたソグド文字表記のパルティア語の讃歌の研究であった．1988 年にトルファンの文物管理所が保管するその断片を調査した際，写真撮影は許されなかったので，文字だけを転写してきた．パルティア語が必ずし

も得意ではない私は，その転写を京都に来ておられた教授に渡して研究するように勧めた．驚くことにそれを見た教授は，即座にその同じ讃歌がベルリンの文書にもあり，たまたま自分はそのテキストの転写を持っているから共同で研究しようと言って下さった．その後同じ讃歌を含む断片は大谷探検隊将来資料の中にも見つかり，論文のタイトルを「ベゼクリク・ベルリン・京都」として『オリエント』で発表した．後にその英語版は，上述の *Manichaica Iranica* に収録されることになった．私が英語に直したものを故 R. Emmerick 教授が添削して下さったのも懐かしい思い出である．Sundermann 教授の東ドイツ時代のお弟子さんには Ch. Reck 博士と I. Colditz 博士がおられる．お二人とも極めて優秀で既に多くの研究を発表しておられる．このお二人も Sundermann 教授の「業績」に加えられよう．現在トルファン学研究所でソグド文字写本の研究をしているその Reck 博士は，後に同じ讃歌をもう 1 点ベルリンの資料の中に発見して下さった．深い縁のようなものを感じる．

1996 年 10 月に来日されたおりには龍谷大学からの要請にこたえて，「マニ教と仏教の出会い――仏教がマニ教に与えた影響の問題――」という講演をされた．私が翻訳したその講演の内容は翌年の『龍谷大学仏教文化研究所紀要』36 号に収録されている．この英語版は H. Bechert 教授の 65 歳の記念論文集に掲載され後に *Manichaica Iranica* にも収録された．この時期は大谷探検隊将来のイラン語文書断片全体の写真とテキスト・翻訳を出版するという，百済教授のプロジェクトが動いていた頃で，ベルリンの断片についてノウハウのある Sundermann 教授の援助を仰いだのであった．百済教授の提案によって原寸で印刷した写真版を見ていただければ分かるように，大半は名刺か切手ほどの大きさであって内容の比定は困難を極めた．その中マニ文字で書かれた讃歌を同定するときに示された Sundermann 教授の手腕には，神業のようなものを感じたものである．その成果である『イラン語断片集成　大谷探検隊収集・龍谷大学所蔵中央アジア出土イラン語資料』は，私も含む三人の連名で 1999 年に出版された．

Sundermann 教授との長い親交の中での思い出は多いが，中でも教授の暖かい人間性に係わる事柄を良く思い出す．その一つを披露してこの文章を終わ

りたい．2003 年の夏に西安で史君墓が発掘され，西暦 580 年に刻まれたソグド語と漢文のバイリンガルの墓誌が出土した．北京大学の栄新江教授のご厚意で私がソグド語版を解読することになった．その年の暮れには写真が届き，だいたいの解読を終えた．内容は墓主のソグド人 Wirkak の来歴とその妻 Wyusi との結婚や他界の日付，死後の運命に係わるものであった．結婚の記念日まで記してあるこの墓誌によれば，夫婦は実に 60 年間結婚生活を送り，妻は夫が死んでわずかに 1 ヶ月後の同じ日，しかも結婚記念日に他界したことが分かる．ただ数カ所十分に解読できない部分があった．翌年の 1 月であったと記憶するがベルリンに行ったときに，不明の箇所について教授に御意見をうかがったことがあった．そのとき教授はいつも通りの優しいゆっくりとした口調で，自分も言語のことは分からない．だけれども伝えたい内容はよく分かると言って，ギリシア・ローマ神話にある有名なピレモンとバウキス老夫婦の話をされた．善良な夫婦に褒美を与えると言ったゼウスに，夫婦は，この年齢になればもう何も要らない，ただもしできるなら一緒に死なせて欲しいと願ったというあの話である．Sundermann 教授の夫人はその数年前の 2000 年に病死されていた．お二人はおしどり夫婦で，教授からたびたび夫人の病気を気遣う言葉を聞いていた．教授はこのソグド語の墓誌を読まれて，亡くなった夫人のことを思い出されたのだと思う．きっと今は天国でまたおしどり夫婦の生活を再開しておられることであろう．